

# 子どもとともに発達を歩きたい

龍谷大学 白石正久



## 「発達の節」をのりこえるとき

お母さんお父さんが、子どもさんともに「1歳6か月児健診」を受診したのは何年前のことでしょう。「発達」のスクリーニングで、積木を手にしたときのわが子の姿が思い出されるかもしれません。子どもにとって小さな積木を重ねていくことは、容易なことではありません。写真の子は、がんばって高く積んでいたのです(写真①)。でも途中で崩れてしまったので、積木をお母さんにさしだしてなんとかしてほしいと訴えました(写真②)。「きつとだいたいしようぶだよ」と励まされてもう一度挑戦します。少し心配になって、今度は高く積むことはしないで、いくつも並べて作りました(写真③)。思いはあっても、その通りには

ならない現実の前に、子どもも心のなかでたかたかっているのです。

それでもあきらめない姿は、どの子にもみられます。その一歩を重ねていくことによって、ある日、失敗に負けないで積み切るようになっていきます。たとえば、発達は小さな積木を積み上げるような苦労の積み重ねですが、その道程があるからこそ、パッと景色が開けて新しい世界に飛び出していくときがあります。それが「発達の節」をのりこえるということなのです。

「3歳児健診」の頃も「発達の節」です。この健診では、積むだけではなくて手本と同じものを作るように促されます(写真④)。「お名前はなんですか」と聞かれるだけでお母さんの後ろに隠れてしまふほど他者の意図を意識し、それに応

えなければならぬ自分のことが心配なのです。だから、背中を向けてお母さんの膝の近くでなにかを作りました(写真⑤)。2歳のときにできた「トラック」を何度も作っていたそうです。きつと心のリハーサルをしていたのでしよう。その短くない時間を経て、机に戻って積木を作り始めました。でも、お母さんの指を使って作ろうとするので、積むことしかできなかつたのです(写真⑥)。

このふたつの場面を「テスト」としてみるならば、「できなかつた」という事実が残るだけです。しかし、子どもの心の軌跡をたどれば、他者の意図を受けとめて自分なりの道を作り、せいじっぱいがんばろうとしているのです。それは、「回り道からの挑戦」であり、「発達の節」をのりこえていくための「気張りの

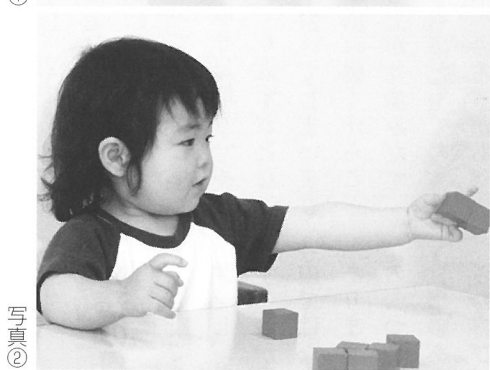
時代」の真つ只中にあることを表現しています。「気張り」とは、心のなかで自分を励ましがんばろうとすることです。その心の育ちが、次の発達段階において前に進んでいく力になるのです。

障害の有無によらず、「発達の節」には「胸突き八丁」というべき上り坂があります。発達へのねがいが高まり、自分の現実との「ずれ」が大きくなるときには、「こだわり」が現れたり、「甘え」「反抗」が強くなったりします。おとなはそれらを困ったことだと思ってしまうのですが、そんなとき子どもも自分への「情けなさ」とともにありながら、「気張りの時代」を生きているのです。

まして障害や病のある子どもは、重荷を背負いつつ「発達の節」をのりこえていこうとしています。その心のありよう



写真①



写真②



写真③



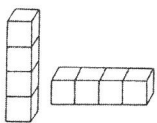
写真④



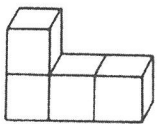
写真⑤



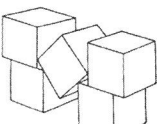
写真⑥



「積む」「並べる」(1歳)



「トラックの模倣」(2~3歳)



「門の模倣」(4歳)